

芥川龍之介

仏蘭西文學と僕





仏蘭西文学と僕



僕は中学五年生の時に、ドオデエの「サツフォ」と云う小説の英訳を読んだ。勿論もちろんどんな読み方をしたか、当てになつたものではない。まあ好い加減に辞書を引いては、頁ページをはぐつて行つただけであるが、兎も角それが僕にとっては、最初に親しんだフランス仏蘭西小説だつた。「サツフォ」には感心したかどうか、確な事は覚えていない。唯ただあの舞踏会から帰る所に、明け方の巴里パリの光景を描いた、たった五、六行の文章がある。それが嬉しかった事だけは覚えている。

それからアナトオル・フランスの「タイス」と云う小説を読んだ。何でもその頃「早稲田文学」の新年号に、安成貞男君が書いた紹介があつたものだから、それを読むとすぐに丸善へ行つて買って来たと言ふ記憶がある。

この本は大いに感服した（今でもフランスの著作中、一番面白いのは何かと問われれば、すぐに僕は「タイス」と答える。その次に「女王<sup>レエン</sup>ペドオク」を挙げる。名高い「赤百合<sup>あかゆり</sup>」なぞと云う小説は、更にうまいと思われぬ）。尤<sup>もつと</sup>も議論の面白さなぞは、所々しか通じなかつたらしい。しかし僕はタイスの行の下へ無暗に色鉛筆の筋を引いた。その

本は今でも持っているが、当時筋を引いた所は、ニシアスの言葉が一番多い。ニシアスと云うは警句ばかり吐いているアレクサンドリアの高等遊民である。——これも僕が中学の五年生の時分だった。

高等学校へはいった後は、語学も少し眼鼻がついたから、時々仏蘭西の小説も読んで見た。但しその道の人<sup>ただ</sup>が読むように、系統的に読んだのでも何でもない。手当り次第どれでも御座れに、ざっと眼を通したのである。その中でも覚えているのは、フロオベルに「聖<sup>サン</sup>アントワンの誘惑」と云う小説がある。あの本が何度とりかかって

も、とうとうしまいまで読めなかった。尤も口オタス・ライブラリイと云う紫色の英訳本で見ると、無茶苦茶に省略してあるから、造作なくしまいまで読んでしまう。当時の僕は「聖アントワンの誘惑」も、ちやんと心得ているような顔をしていたが、実はあの紫色の本の御厄介になっていたのである。近頃ケエベル先生の小品集を読んで見たら、先生もあれと「サラムボオ」とは退屈な本だと云っている。僕は大いに嬉しかった。しかしあれに比べると、まだ「サラムボオ」なぞの方が、どの位僕には面白いかわれない。それからド・モオパスサンは、敬



服しても嫌いだった（今でも二、三の作品は、やはり読むと不快な気がする）それからどう云う因縁か、ゾラは大學へはいるまでに、一冊も長編を読まずにしまった。それから、ドオデエはその時分から、妙に久米正雄と似ている気がした。尤もその時分の久米正雄は、やっと一高の校友会雑誌に詩を出す位な事だったから、余程ドオデエの方が偉く見えた。それからゴオテイエは面白がって読んだ。何しろ絢爛無双けんらんぶそうだから、長篇でも短篇でも愉快だった。しかし評判の「マドモアゼル・モオパン」も西洋人の云う程難有くはなかった。「アヴァタール」とか

「クレオパトラの一夜」とか云う短篇も、ヂョオデ・ム  
ウアなぞがかたじけ忝ながるように、渾然玉こんぜんの如しとは思われ  
なかつた。同じカンダウレス王の伝説からも、ヘツベル  
はあの恐るべき「ギイゲスの指環」を造り出している。  
が、翻つてゴオテイエの短篇を見ると、主人公の王様で  
も何でも、一向澆刺はつらつたる趣おもむきがない。但しこれはずっと後のち  
に、ヘツベルの芝居を読んでいた時、その編輯者の序文  
の中に、事によるとゴオテイエの短篇が、ヘツベルにヒ  
ントを与えたのかも知れないと云う、尤もらしい説が拳  
ていたから、又ゴオテイエを引張り出して見て、その感

を深くしたような次第である。それから、——もう面倒臭くなつた。

一体僕が高等学校時代に、どれこれの本を読みましたと云つた所が、面白い事も何もある筈はない。精々人を煙けむに捲まく位が落ちである。唯折角饒舌しゃべつたものだから、これだけの事はつけ加えて置きたい。と云うのは当時或は当時以後五、六年の間に、僕が読んだ仏蘭西の小説は、大抵現代に遠くない、或は現代の作家が書いたものである。さつと遡さかのぼつて見た所が、シャツオブリアンとか、——ぎりぎり決着の所と云つても、ルツソオとかヴオル

テエルとか、より古い所へは行っていない（モリエルは例外である）。勿論文壇にも篤学の士が多いから、中には *Cent nouvelles Nouvelles du roi Louis XI* までも読んでいると云う大家があるかも知れない。しかしそう云う例外を除くと、まず僕の読んだような小説が、文壇一般にも読まれている仏蘭西文学だと云つても好い訳である。すると僕の読んだ小説の事を話すのは、広い文壇にも大いに関係があるのだから、莫迦ぼかにして聞いたり何かしてはいけない。——これでもまだまだ勿体がつかなければ、僕がそんな本しか読んでいないと云う事は、文壇に影響

を与えた仏蘭西文学は、大体そんな本の外に出ないと云う事になりはしないか。文壇はラブレエの影響も、ラシイヌやコルネイユの影響も受けていない。唯<sup>ただ</sup>おもに十九世紀以後の作家たちの影響を受けている。その証拠には仏蘭西文学に最も私淑<sup>ほうはく</sup>している諸先輩の小説にも、所謂レスプリ・ゴオアの磅礴<sup>ほうはく</sup>しているような作品は見えない。たとい十九世紀以後の作家たちの中に、ゴオル精神から迸った笑い声が時々響く事があっても、文壇はそれに啞の耳を借すより外はなかつたのである。この点でも日本のパルナスは、鷗外先生の小説通り、永久に真面目

な葬列だった。——こんな理屈も云えるかも知れない。  
だからこの僕の話も、愈いよいよ莫迦にして聞いてはいけない。







日本文学電子図書館

---

「芥川龍之介随筆集」

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

2014年3月14日 第1刷発行

---



日本文学電子図書館